

日本人ムスリム女性のアイデンティティ・マネジメント

——ライフ・ヒストリーに基づいて——

近畿大学 安達智史

1 目的

本報告は、インタビュー・データの分析をもとに、日本人ムスリム女性が、日本という文脈においてムスリムであることをどのようにとらえ、そうした複数のアイデンティティを接合し、マネジメントしているのかについて明らかにすることを目的としている。その際、従来の研究では十分に論じられていなかった、情報化の影響、結婚によらない改宗者、ライフ・ヒストリーとの関係などに焦点が当てられる。

2 方法

本報告は、2016年1～4月に、主に関西圏（一部、中部圏）在住の21名のムスリム女性を対象としておこなわれた、ライフ・ヒストリーに焦点を当てたインタビュー調査のデータに基づいている。インタビューでは、性格や生い立ち、ムスリムになった経緯、イスラームに対する考え方や理想、日本社会という文脈においてムスリムであること、パートナーとの関係などをテーマに聞き取りがおこなわれた。

3 結果

データから、下記の結果が得られた。第一に、インフォーマントの個人的背景とイスラームへの改宗との関係には多様性が存在している。具体的には、家族の宗教的世界観との親和性、神の存在をめぐる個人的探求、アノミックな家庭環境、外国への関心などが挙げられる。第二に、イスラームと触れるきっかけとして海外旅行が重要な役割を果たしているが、同様に、インターネットやチャットを通じた経験もその共通する重要な経路となっている。第三に、いく人かのインフォーマントは、外国人のムスリム男性を夫としている一方で、独身のムスリム女性も多数いた。また、結婚をしている場合でも、必ずしもそれが改宗の理由ではないケースが多数存在している。第四に、パートナーとの婚姻関係は、イスラームの観点から観察されることで、その内容をめぐり交渉や改定がなされたりしている。それは場合によっては、パートナーとの離婚や破局の理由となっている。第五に、インフォーマントが主たる家計維持の役割を果たしている場合が多く、そのことがジェンダー関係をより開かれたものとしている。第六に、イスラームに対する態度（理解や程度）はさまざまであり、それぞれが置かれた状況に依存している。そして第七に、イスラームの知識の習得は、イスラームに対する態度の変更や維持に寄与しており、さまざまな資源（モスク、夫、友人、インターネット、ブログなど）を利用することで、インフォーマントはイスラーム理解やそれへの態度、自身の生活やパートナーとの関係のある程度自身でコントロールしている。

4 結果

以上の結果は、日本人ムスリム女性がイスラーム理解や実践に対して受動的ではなく、より積極的に関与することで、自身のアイデンティティを構築していることを示唆している。とりわけ、従来の研究に見られる、「外国人ムスリム男性の妻」という日本人ムスリム女性像を相対化し、それとは異なる経路でイスラームと出会い、それを他者（ムスリム／非ムスリム）や自身のライフ・ヒストリーとの関わりの中かで、人生やアイデンティティの不可欠な部分として取り入れる様子を観察することができた点は、本報告の意義である。